若年女性の生きづらさにみる共依存症的特徴とデート DV 経験との関連

Codependent Traits and Dating Violence among Young Women: Insights from Experiences of Psychosocial Distress

陶　嘉禕
TAO JIAYI

Abstract：The purpose of this study was to examine the relationship between codependent traits and experiences of dating violence among young women, focusing on the psychosocial distress in young women. A cross-sectional web survey was conducted in March 2023, targeting individuals aged 18-29 with dating violence experiences. A total of 459 female respondents were analyzed.

Binary logistic regression revealed that self-sacrificing caregiving was significantly associated with victimization (p=0.016, OR=1.466) and perpetration (p=0.018, OR=1.478). Additionally, attempts to control others (p=0.045, OR=1.352) and low self-esteem (p=0.003, OR=1.651) were linked to perpetration. These findings indicate that codependency tendencies, such as overcontrolling behavior, self-sacrifice and low self-esteem, increase the risks of asymmetric power dynamics, leading to both victimization and perpetration in intimate relationships. The discussion suggests that tendencies may stem from internalized gender norms and societal expectations, reinforcing psychosocial distress.

In conclusion, dating violence among young women, particularly perpetration, should not be addressed within the broader context of family and social environments that foster codependency alongside structural factors limiting women's autonomy.

Key words：codependence（共依存），dating violence（デート DV），
psychosocial distress（生きづらさ）

１．はじめに

（１）研究の背景―若年女性の抱える困難

近年、女性や若者の生きづらさが社会的に注目されている。その背景には、若年女性の抱える困難さが多様化、複合化している。特に虐待や性暴力被害が深刻であり、社会生活場面の多岐にわたり、若年女性の生きづらさの要因の一つとなっていると考える。

そうした実態が内閣府（2018）などにおいても報告されている。例えば、19 歳女性の事例では、幼少期に家庭内不和を経験し、父による母への暴力を目にし、自身の気持ちを否定される環境で育った。中学・高校時代ではいじめを経験し、リストカットをしていた。インターネット上での交流を契機として性被害に遭い、アルバイト先ではセクシュアル・ハラスメント、街中での勧誘を契機に性風俗関連のアルバイトにつながり、客に性行為を強要されるなど、連続的に多様な被害に遭っていた。その結果、「自分が男性の性欲

処理用のおもちゃとして存在価値のない人間のように感じる」（内閣府 2018:55）ようになった。この事例では、女性は DV（ドメスティック・バオレンス）家庭で育ち、「面前 DV」による心理的虐待の被害を受けていたことが読み取れる。そのうえで、いじめ経験や多様な性暴力被害経験が連鎖し、心身の健康を悪化させ、人権が侵害され続けていた。それらの被害が予期せぬ妊娠や自傷行為・自殺念慮を引き起こすだけでなく、トラウマや精神疾患に苦しまれ続けることで、のちに就労が困難になり経済的困窮に陥る可能性も考えられる。このように、これまで若年女性が性の商品化の対象として扱われることが多い状況にもかかわらず、自身の経験や気持ちを言語化しにくく、自己責任論として片づけられることが多いため、若年女性の抱える困難が社会的に顕在化してこなかったと指摘されている（「困難な問題を抱える若年女性の包括的な支援に関する調査研究」ワーキングチーム 2022）。コロナ禍以降若年女性の自殺者数が増加傾向にあり、若年女性の権利侵害への対応が急務とされ、新たな法整備も進められるようになった。

（2）DV・デート DV 問題に注目する必要性

DV は女性に対する暴力の一形態として長らく存在しており、上記の事例のように児童虐待問題との交差性も指摘されている（増井 2024）。DV とは配偶者や恋人など親密な関係にある、またはあった者から振るわれる暴力である（内閣府 2016）。さらに、近年では婚姻関係のある夫婦間の DV のみならず、若者恋人間の暴力、いわゆるデート DV への社会的注目も高まってきている。米国等では特に婚姻関係のない 10 代などの恋人間の暴力を dating violence といい、日本では山口（2003）により「デート DV」と呼ばれて以来、言葉として定着されつつある。

なぜデート DV に注目する必要があるかというと、当事者がデート DV に気づかない、または周囲が見過ごすと、結婚後に DV が長期化し、児童虐待にもつながり、暴力の世代間連鎖に発展するリスクが高いためである。実際に、日本ではじめて行政による DV に関する調査では、DV 被害者が最初に暴力を受けた時期として、「交際はじめ～結婚（交際期間）」が最も多かったと明らかにされていた（東京都生活文化局 1998：83）。

内閣府（2024）によると、交際相手から何らかの身体的・心理的・経済的・性的暴力の被害を受けたことのある女性は 22.7% にのぼる。同調査では 30 歳代の女性では被害経験が最も多い結果となっているが（内閣府 2024:47）、10 歳代に焦点をあてると、交際経験のある女子中高生のうち、45.8% が何らかのデート DV 被害を受けたことがあると報告されている（エンパワメントかながわ 2025）。このように、若年層におけるデート DV の実態は看過できない。デート DV は親密なパートナー関係に起きる暴力として、両者の間に非対等的な力関係が存在している。その背景には性暴力に対する容認やジェンダー不平等といった社会的環境要因がある。

またデート DV に関して、従来の支配構造や女性に対する抑圧にとどまらず、より複雑な被害・加害構造が示唆されている。具体的には、デート DV に関する調査研究では、男性の精神的被害が多い（松野・秋山 2009；上野ら 2012）、女性による加害が多い（小泉・吉武 2008）、または性差がみられない（井ノ崎・野坂 2009）など、多様な結果が得られていた。若年層に限らず、男性による DV 被害相談は 15 年間で大幅に増え、2024 年には 29.7% に増加した（警察庁 2025）。これらのことから、親密な関係における女性

による男性への加害は、どう解釈すべきなのかが問題提起をされている。例えば、上野（2014）はそもそも何を暴力とみなすかという定義の問題、親密な関係における暴力の本質という問題を考える必要があると述べている。また、暴力の双方向性の問題にも注意すべき点が指摘されている（赤澤ら 2017；陶 2022）。

（3）「共依存」の視点

こうした親密なパートナー関係における若年女性の被害・加害を理解するには、重要な視点として「共依存」が挙げられる。共依存（codependence）は、1970 年代アルコール依存症者の妻たちに対するカウンセリングのなか、臨床現場で生まれた概念である。医学的診断名ではないため、統一した定義が確立されておらず、分野や理論的立場によって解釈に相違がある。また、「共依存」「共嗜癖」「共依存症」など、多様な表現が用いられているほか、共依存という表現が時に二者関係を指す言葉として、時には個人の病理を指す言葉として使われると指摘されている（吉岡 2002:12）。

共依存の定義について、Schaef（1987）、Beattie（1987）、Giddens（1992）などで検討されていた。Beattie（=2011:16）は、「共依存症者とは、特定の他者の行動に左右されており、自分が相手の行動をコントロールしなければならないという強迫観点にとらわれている人のこと」と定義づけている。Giddens（=1995:135）も共依存症者が相手の欲求に一身を捧げていなければ、自信をもつことができないと指摘するうえで、「共依存症的《関係性》は、同じような類の衝動強迫性に活動が支配されている相手と心理的に強く結びついている間柄」だと述べている。本論文では、個人の対人関係における心理的・行動的特徴に注目し、Beattie の定義を参照し、「共依存症的特徴」との表現を用いる。なお、先行研究によっては、「症状」「行動パターン」「傾向」といった異なる表現が用いられている。本稿では先行研究に関する記述では先行研究で用いられる表現をそのまま使用する。

Pia（=2002:134）は、「かけがえがない」「傷つきやすい」や「依存的である」等の子どもの生まれつきの特質が親による虐待を受けることで、機能不全家庭内の「生き残り特性」に歪められ、やがて大人になった時に共依存症の中核症状となることを述べている。その中核症状について、①適度の自尊心を経験することが困難、②機能的境界設定が困難、③自分自身の現実を認めることが困難、④自分の必要なものやほしいものを認めて満たすことが困難、⑤自分の現実を適度に表現することが困難といった 5 点があげられている（Pia=2002:34-87）。幼少期の被虐待経験や機能不全家庭での養育が、共依存症的な心理・行動の特徴を形成し、その後の対人関係に困難さをもたらすことが示唆されている。

（4）デート DV と共依存に関する先行研究の批判的検討

デート DV と共依存との関連について、先行研究においても検討されてきた。野口（2009）は大学生に調査し、共依存傾向の高低による群間比較を行った。その結果、男女全体および女性のみでの分析において有意差が認められ、共依存傾向の高い人ほど、特に女性がパートナーから暴力的な言動や行為を受けやすいことが示唆された。

赤司（2018）は、共依存の傾向を高める要因の一つである機能不全家族おける愛着形

成の問題、デート DV と共依存関係に共通してみられる支配構造に着目し、大学生を対象に、共依存、成人愛着とデート DV 精神的暴力の三者の因果関係を検討した。その結果、男女とも成人愛着による影響から共依存を経由し、デート DV の加害傾向につながるという構図が検証された。

上記の先行研究から、個人の共依存的傾向とデート DV 被害・加害経験の間に一定の関連があると示されている。共依存的傾向が高ければ被害を受けるリスクが高まることや、親密性の回避や見捨てられ不安といった愛着形成の課題が影響し、共依存的傾向を高め、デート DV 加害のリスクが高まることが指摘された。しかし、どのような共依存症的特徴がデート DV 経験に影響を及ぼしているのか、十分に明らかにされていない。一括り「共依存症」と言っても、それぞれの特徴に差異があると考える。例えば、共依存症的特徴のなかで、相手の行動や考え方をコントロールしようとするという傾向が強い人は、よりデート DV 加害を行いやすいのではないかと考える。一方で、自尊感情の低い人や自分自身を犠牲にして相手の世話をする傾向が強い人はよりデート DV 被害を受けやすいのではないかと考える。このように、具体的にどのような共依存症的特徴がデート DV のリスクを高めているのかが明らかになれば、リスクの順位や潜在的なターゲット層にフォーカスして対応するなど、よりデート DV 予防の有効性を高めることができると考えられる。

また、野口および赤司の研究では、性別による比較検討がされているが、共依存的傾向との関連について、デート DV 被害または加害のどちらかのみが取り上げられている。しかしながら、前述した女性に起きる被害・加害経験の実態や暴力の双方向性の問題、つまりパートナーとの関係において同時に被害・加害を経験している可能性を踏まえて、その両者と共依存症的特徴との関連を検討する必要性があると考える。

本研究では、若年女性の対人関係における共依存症的特徴に焦点をあて、どのような共依存症的特徴がデート DV 被害・加害経験に関連するのかを明らかにする。恋愛関係における暴力を経験した女性の心理的・社会的要因を検討し、若年女性の生きづらさと支援を再検討するための手がかりを提示したい。

2．研究の目的

本研究の目的は、共依存症的特徴とデート DV の被害・加害経験との関連を明らかにし、若年女性の生きづらさの観点から考察することである。

3．研究方法

（1）データの収集

2023 年 3 月に、交際経験のある 18 歳～ 29 歳の大学生・短期大学生・大学院生・専門学校生を対象に Web アンケート調査を実施した結果、男女 600 名による有効回答が得られた。そのうち、性自認として「女性」を答えた者が 459 名であり、全体の 76.5% を占めた。本研究では女性のみのデータを抽出し、分析した。なお、本調査に関する回答者全員の分析結果は、日本精神保健福祉学会第 11 回全国学術集会にて発表した。

主な調査内容は、共依存症的特徴、デート DV 被害経験、デート DV 加害経験であった。デート DV 被害・加害経験については、陶（2022）による 19 項目を用いて「まったくなかった」「1 回あった」「たまにあった」「しばしばあった」「わからない」の 5 件法で

回答を求めた。共依存症的特徴を問う項目は、洪（2006）による共依存尺度、西尾（2000:225-234）を参考に、12 項目を作成した。各項目は「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「ややあてはまる」「非常にあてはまる」の 4 件法で回答を求めた。

（2）分析

デート DV 経験を問う項目でいずれか「わからない」との回答があった場合は欠損値として扱い、分析対象から除外した。その結果、448 件の回答が分析対象となった。そのうち、性的指向を異性と回答した者が 413 名、同性と回答した者が 10 名、回答しないと選択した者が 25 名であった。所属については、「大学（4 年制）」354 名、「短期大学」12 名、「大学院」27 名、「専門学校」55 名であった。平均年齢は 21.09 歳であった。

被害経験、加害経験、共依存症的特徴について、それぞれ項目分析を行い、平均値と標準偏差を確認し、信頼性の分析を行った。共依存症的特徴とデート DV 経験の有無の関連性を検討するために、二項ロジスティック回帰分析を行った。被害経験と加害経験の有無について、合計点を算出したあとに、ダミー変数を作成した。それぞれすべての項目で「まったくなかった」と回答したケースを「経験なし（0 群）」とし、いずれかの項目で「1 回あった」「たまにあった」「しばしばあった」と回答したケースを「経験あり（1 群）」とした。共依存症的特徴については、順に「まったくあてはまらない」を 1 点、「非常にあてはまる」を 4 点とした。デート DV 経験の有無（「被害経験ダミー」「加害経験ダミー」）を従属変数とし、共依存症的特徴を問う 12 項目を独立変数とし、二項ロジスティック回帰分析を行った。統計的解析は、IBM SPSS Statistics 30 を用いて、両側検定にて有意水準を 5% 未満とした。

（3）倫理的配慮

本調査は早稲田大学「人を対象とする研究倫理調査委員会」による承認を得て実施した（承認番号 :2020-321）。Web 調査画面で調査への参加が任意であること、一部質問による心理的不快が生じる可能性があること、調査で収集する回答は研究遂行の範囲のみに利用されること、個人が特定されないこととの趣旨を明記した。回答者に上記の趣旨を確認し、同意すると選択してもらったうえで、調査に進められるようにした。

4．結果

（1）質問項目の信頼性

質問項目の信頼性を検討するために、内的整合性を示す指標のクロンバックの α 係数を算出した。その結果、被害経験 19 項目の Cronbach α 係数が 0.890、加害経験 19 項目の Cronbach α 係数が 0.904 であった。共依存症的特徴 12 項目の Cronbach α 係数が 0.871 であった。いずれも項目の内的一貫性という点では十分な信頼性が得られた。

（2）被害経験と加害経験の結果

被害経験各項目の平均値と標準偏差は、表1に示した通りである。被害経験率が最も高かったのは言葉による暴力（項目4）であった。電話・メール・SNS等のチェックと監視（項目8）の経験率は2番目に続いた。加害経験各項目の平均値と標準偏差は、表2に示した。加害経験率は、被害経験と同様に、言葉による暴力（項目4）と電話・メール・SNS等のチェックと監視（項目8）が上位2位に多かった。また、デートDV経験の有無については、表3に示した通りである。

表1　デートDV被害経験の平均値と標準偏差

質問項目	平均値	標準偏差
⑴顔・体を蹴られたり、殴られたり、叩かれたりされる	1.07	0.363
⑵物を投げつけられる	1.06	0.343
⑶殴るなどのふりをして脅されたり、大声で怒鳴られたりされる	1.10	0.420
⑷バカにされたり、否定されたり、暴言など傷つく言葉を言われる	1.28	0.704
⑸別れたら死ぬ、または殺すなどと言われ、脅迫される	1.12	0.458
⑹意に沿わないと、長時間無視される	1.14	0.529
⑺服装・髪型、進路などを勝手に決めつけられ、従わせられる	1.08	0.393
⑻電話・メール・SNSなどを細かくチェックされたり、監視されたりされる	1.23	0.676
⑼人と会うことや1人の外出を報告させられたり、制限されたりされる	1.20	0.631
⑽いつも一緒にいることを要求される	1.14	0.525
⑾怒りや暴力の原因は、「あなたのせいだ」などと言われ、非難される	1.09	0.454
⑿性的行為を無理強いされる	1.18	0.583
⒀避妊の協力を拒否される	1.15	0.554
⒁裸や性行為の写真・動画を撮られる、または送ってほしいと強要される	1.16	0.558
⒂見たくないのに、ポルノビデオやポルノ雑誌を見せられる	1.04	0.296
⒃デートの費用を無理やり払わせられる	1.05	0.317
⒄生活費や給料などを含め、お金をせびられる	1.06	0.332
⒅（貸した）お金を返さない	1.09	0.397
⒆高価なプレゼントなどを買ってもらうよう強要される	1.02	0.188

表2　デートDV加害経験の平均値と標準偏差

質問項目	平均値	標準偏差
⑴顔・体を蹴ったり、殴ったり、叩いたりする	1.06	0.329
⑵物を投げつける	1.07	0.354
⑶殴るなどのふりをして脅したり、大声で怒鳴ったりする	1.07	0.386
⑷バカにしたり、否定したり、暴言など傷つく言葉を言う	1.19	0.577

⑸別れたら死ぬ、または殺すなどと言い、脅迫する	1.09	0.428
⑹意に沿わないと、長時間無視する	1.16	0.528
⑺服装・髪型、進路などを勝手に決めつけ、従わせる	1.06	0.323
⑻電話・メール・SNS などを細かくチェックしたり、監視したりする	1.18	0.573
⑼人と会うことや 1 人の外出を報告させたり、制限したりする	1.14	0.518
⑽いつも一緒にいることを要求する	1.09	0.423
⑾怒りや暴力の原因は、「あなたのせいだ」などと言い、非難する	1.09	0.411
⑿性的行為を無理強いする	1.09	0.423
⒀避妊の協力を拒否する	1.04	0.289
⒁裸や性行為の写真・動画を撮る、または送ってほしいと強要する	1.04	0.311
⒂見たくないのに、ポルノビデオやポルノ雑誌を見せる	1.03	0.225
⒃デートの費用を無理やり払わせる	1.03	0.220
⒄生活費や給料などを含め、お金をせびる	1.04	0.307
⒅（借りた）お金を返さない	1.04	0.296
⒆高価なプレゼントなどを買ってもらうよう強要する	1.03	0.225

表３　デート DV 被害・加害経験の有無

	経験なし（0 群）	経験あり（1 群）
デート DV 被害	N = 296	N = 152
デート DV 加害	N = 319	N = 129

（３）共依存症的特徴とデート DV 経験との関連

共依存症的特徴各項目の平均値と標準偏差は表 4 に示した。得点が一番高かったのは、項目 9「私は相手の気分を敏感に察して、先のことを考えすぎたりしてしまう。」であった。続いて、項目 5「私は『ノー』が言えず、頼みごとをついに引き受けてしまう。」、項目 10「私は自尊感が低く、自分自身を肯定的に受け入れられない。」が二番目、三番目に高かった。

表４　共依存症的特徴各項目の平均値と標準偏差

項目	平均値	標準偏差
⑴私は家族、恋人、友人など周りの人の感情によく左右される。	2.60	0.810
⑵私は他者の行動、感情、考え方、状態、結果を変えようとコントロールする。	2.06	0.813
⑶私は問題や危険が起こるような状況や人間関係に巻き込まれることが多い。	2.00	0.859
⑷私は自らを犠牲にしても、恋人や家族の世話を焼いてしまう。	2.27	0.883
⑸私は「ノー」が言えず、頼みごとをつい引き受けてしまう。	2.64	0.894

⑹私は自身の境界線がはっきりしない、または他者との関係で境界を維持するのが難しい。	2.16	0.858
⑺私は過去の失敗や間違いから学ぶことができず、同じことを繰り返してしまう傾向がある。	2.18	0.826
⑻私はパートナーとの関係において、相手に合わせ、相手の決定に従うことが多い。	2.38	0.884
⑼私は相手の気分を敏感に察して､先のことを考えすぎたりしてしまう。	2.74	0.906
⑽私は自尊感が低く、自分自身を肯定的に受け入れられない。	2.61	0.954
⑾私は「こうあるべきだ」いった理想論､「男らしさ・女らしさ」といったジェンダーバイアスなどにとらわれやすい。	1.98	0.827
⑿私は自分が子ども時代に虐待されたのではないかと疑問を抱いている。	1.66	0.906

共依存症的特徴とデート DV 被害・加害経験の有無との関連を二項ロジスティック回帰分析で検討した（表 5、表 6）。その結果､「私は自らを犠牲にしても、恋人や家族の世話を焼いてしまう。」（p = 0.016、OR = 1.466）と、被害経験に有意な正の関連が認められた。加害経験との関連では、3 項目において有意な正の関連が認められた。具体的には、項目 2 の「私は他者の行動、感情、考え方、状態、結果を変えようとコントロールする。」（p = 0.045、OR = 1.352）、項目 4「私は自らを犠牲にしても、恋人や家族の世話を焼いてしまう。」（p = 0.018、OR = 1.478）と項目 10「私は自尊感が低く、自分自身を肯定的に受け入れられない。」（p = 0.003、OR = 1.651）であった。

表 5　共依存症的特徴とデート DV 被害経験との関連

項目	偏回帰係数	オッズ比	p 値	95% 信頼区間
⑴私は家族、恋人、友人など周りの人の感情によく左右される。	-0.161	0.852	0.367	0.601~1.207
⑵私は他者の行動、感情、考え方、状態、結果を変えようとコントロールする。	0.017	1.017	0.910	0.763~1.355
⑶私は問題や危険が起こるような状況や人間関係に巻き込まれることが多い。	0.201	1.223	0.184	0.909~1.645
⑷私は自らを犠牲にしても、恋人や家族の世話を焼いてしまう。	0.382	1.466	0.016*	1.073~2.002
⑸私は「ノー」が言えず、頼みごとをつい引き受けてしまう。	-0.417	0.659	0.013*	0.475~0.915
⑹私は自身の境界線がはっきりしない、または他者との関係で境界を維持するのが難しい。	-0.122	0.885	0.493	0.623~1.256
⑺私は過去の失敗や間違いから学ぶことができず、同じことを繰り返してしまう傾向がある。	0.157	1.170	0.348	0.843~1.623
⑻私はパートナーとの関係において、相手に合わせ、相手の決定に従うことが多い。	0.196	1.217	0.225	0.886~1.671

⑼私は相手の気分を敏感に察して、先のことを考えすぎたりしてしまう。	0.305	1.357	0.077	0.968~1.903
⑽私は自尊感が低く、自分自身を肯定的に受け入れられない。	0.279	1.322	0.073	0.974~1.795
⑾私は「こうあるべきだ」いった理想論、「男らしさ・女らしさ」といったジェンダーバイアスなどにとらわれやすい。	0.096	1.100	0.534	0.814~1.487
⑿私は自分が子ども時代に虐待されたのではないかと疑問を抱いている。	0.221	1.248	0.078	0.976~1.596

*$p<0.05$

表６　共依存症的特徴とデートDV加害経験との関連

項目	偏回帰係数	オッズ比	p値	95%信頼区間
⑴私は家族、恋人、友人など周りの人の感情によく左右される。	-0.176	0.839	0.343	0.584~1.206
⑵私は他者の行動、感情、考え方、状態、結果を変えようとコントロールする。	0.302	1.352	0.045*	1.006~1.818
⑶私は問題や危険が起こるような状況や人間関係に巻き込まれることが多い。	0.182	1.200	0.245	0.882~1.632
⑷私は自らを犠牲にしても、恋人や家族の世話を焼いてしまう。	0.391	1.478	0.018*	1.070~2.043
⑸私は「ノー」が言えず、頼みごとをつい引き受けてしまう。	-0.284	0.753	0.101	0.536~1.057
⑹私は自身の境界線がはっきりしない、または他者との関係で境界を維持するのが難しい。	-0.196	0.822	0.290	0.571~1.182
⑺私は過去の失敗や間違いから学ぶことができず、同じことを繰り返してしまう傾向がある。	0.086	1.090	0.619	0.776~1.532
⑻私はパートナーとの関係において、相手に合わせ、相手の決定に従うことが多い。	0.066	1.068	0.695	0.768~1.487
⑼私は相手の気分を敏感に察して、先のことを考えすぎたりしてしまう。	0.052	1.054	0.773	0.739~1.502
⑽私は自尊感が低く、自分自身を肯定的に受け入れられない。	0.501	1.651	0.003**	1.192~2.285
⑾私は「こうあるべきだ」いった理想論、「男らしさ・女らしさ」といったジェンダーバイアスなどにとらわれやすい。	0.245	1.278	0.122	0.937~1.743
⑿私は自分が子ども時代に虐待されたのではないかと疑問を抱いている。	0.034	1.035	0.794	0.801~1.337

*$p<0.05$　** $p<0.01$

5．考察

（1）自己犠牲・世話焼き

本研究では、自らを犠牲にして恋人や家族の世話をしやすい若年女性はデート DV 被害を受けやすいとの仮説に対し、結果としてデート DV 被害・加害の両方を経験しやすい可能性が示唆された。Beattie（=2011:59、61）は、世話焼きが共依存症者の「特技」だと述べ、世話することや他者の面倒をみることで自身の劣等感を覆い隠し、他者に必要とされる欲求を満たそうとし、周りの人々が自分に依存しているように見えると述べている。自己犠牲・世話焼きという心理的・行動的特徴をもつ若年女性の対人関係には、大きく二つのパターンが考えられる。一つは、自己犠牲によって恋人との関係で自身を従属的な位置に置くパターンである。もう一つは、相手に対する過度な世話を通して、相手にとっての自身の存在価値を高めようとするパターンである。しかし、そのいずれの場合も恋人と対等的な関係がうまく構築されず、前者の場合には被害に遭うリスクが高まり、後者の場合には SNS 等のチェックや監視といった支配的な行動につながるリスクが高まる。

そうした行動の特徴は、社会が女性に期待する性役割や女性自身が内在化する社会的役割意識と関連していると考える。平野ら（2020）による 20 代への調査結果では、社会における女性の役割として「社会をひっぱる役割」「他者をサポートする役割」「癒しを提供する役割」「家庭を守る役割」等のカテゴリーがあげられた。若年層による女性の役割に関する意識の差があるなか、特に「家庭を守る」「細かい気配りをする」「男性に守られる」「男性を立てる」といった暗黙に内在化した性役割意識が若年女性に影響を与え、行動上に自己犠牲・世話焼きとして反映されると考えられる。その結果、恋人との対等性の確保に困難さを増し、上述したデート DV の被害・加害のリスクを高める要因となりうる。

（2）他者へのコントロールと低い自尊感・自己評価

本研究では、他者をコントロールしようとする若年女性、また自分自身を肯定的に受け入れない若年女性がよりデート DV 加害を行いやすい可能性が示唆された。共依存の最も主要な特徴は、本人が意識しているかしていないかにかかわらず、他者を強力にコントロールしようとすることだと指摘されている（James 2000）。これは、DV における支配構造と共通している。味沢（2018:15-16）は多くの DV 加害者が脆弱な自我を防衛するために、力で家族をコントロールしようとし、無意識の心の動きやその結果の行動を家族のせいだと意識し、暴力を正当化すると述べている。すなわち、他者へのコントロールは、自尊感情の低さの一表現として理解できる。

本研究の単純集計では、自尊感が低く自分自身を肯定的に受け入れらないについて、「非常にあてはまる」と「ややあてはまる」を回答した者が全体の 53.3% を占めた。日本の若者の自己肯定感が低いことは長らく指摘されているが、若者の自尊感情に与える要因や背景は様々ある。若年女性の場合、性別役割規範やルッキズムといった社会に内在する差別構造にかかわると考えられる。西本・山口（2025）の調査では、対象者全員が綺麗になりたいのは自己満足のためと回答し、ほとんどの対象者が幼少期から容姿に対してコンプレックスを感じていた。社会に蔓延る女性に対する差別、または女性であるゆえに求めることは、女性の自己肯定感を押し下げ、女性が生きにくくなっている。さらに、今日

では若者がSNSの利用に多くの時間を費やす傾向があり、SNSを利用していると他者と比較してしまいがちであることが指摘されている（杉原 2023）。

そうした自尊感情・自己肯定感が顕著に低い場合、親密なパートナー関係において、不安や不信感等を抱きやすくなり、見捨てられ不安につながる可能性がある。具体的には、「恋人に浮気されるのではないか」といった思いから、恋人の行動を確認・制限しようとする束縛行為につながりやすい。そうした他者へのコントロールがデートDV加害行動として表面化すると考えられる。これらを踏まえると、若年女性の自尊感情・自己肯定感の向上を図る視点は、デートDV加害予防を検討するうえで重要な手がかりだと考えられる。

6．おわりに

本研究は、若年女性の生きづらさに注目し、どのような共依存症的特徴がデートDV経験に影響を及ぼすのかを検討した。その結果、自己犠牲・世話焼き、他者へのコントロールや低い自己評価といった共依存症的な特徴は、デートDV加害経験との関連性が示唆された。若年女性のデートDV加害問題は、単独で取り上げるのではなく、そうした共依存症的な心理・行動の特徴を生み出す家庭環境や社会的環境、女性が自分らしく生きることができない背景のもとで取り上げる必要があると考える。本研究は学生層に絞ったが、今後は同年代の社会人層にも調査を行い、比較検討等を行っていきたい。

文献

Anne Wilson Schaef（1987）*When Society Becomes an Addict*. Harper & Row, New York.（= 1993、齋藤学監訳『嗜癖する社会』誠信書房）

Anthony Giddens（1992）*The Transformation of Intimacy*. Polity Press, Stanford.（= 1995、松尾精文･松川昭子訳『親密性の変容―近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム―』而立書房）

赤司祐基（2018）「共依存傾向者の『成人愛着』と『デートDVの精神的暴力』との関係―性別による差異を念頭において―」九州産業大学大学院臨床心理学論集13、11-25。

赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子(2017)「デートDVにおける暴力の頻度と精神的ダメージ：ジェンダーと暴力の双方向性への着目」『人間文化学部紀要』17、56-68。

味沢道明(2018)「DV・家族問題―日本家族再生センターの支援とは」日本家族再生センター編『DVはなおる続被害・加害当事者が語る「傷つけない支援」』ジャパンマシニスト社、12-46。

平野真理・三浦正江・近藤有美香（2020）「現代の若者が持つ社会における暗黙の女性観の探索的検討―文章完成法を用いた質的分析―」『東京家政大学研究紀要』60（1）、57-64。

井ノ崎淳子・野坂裕子（2009）「大学生における加害行為と攻撃性との関連」『学校危機とメンタルヘルス』2、73-85。

洪金子（2006）「共依存尺度の開発」『アディクションと家族』23（3）、265-278。

「困難な問題を抱える若年女性の包括的支援に関する調査研究」ワーキングチーム（2022）「困難な問題を抱える若年女性に対する支援スタートアップマニュアル〔第 1.0 版〕」https://www.mhlw.go.jp/content/001232761.pdf（2026.1.26）

James Sack（2000）「臨床心理学の立場からみた共依存」吉岡隆編『共依存―自己喪失の病』中央法規、195-203。

警察庁（2025）「令和 6 年におけるストーカー事案、配偶者からの暴力事案等、児童虐待事案等への対応状況について」https://www.npa.go.jp/bureau/safetylife/stalker/R6_STDVRP_CA_kouhoushiryou.pdf（2026.1.26）

小泉奈央・吉武久美子（2008）「青年期男女におけるデート DV に関する認識についての調査」『純心現代福祉研究』12、61-75。

増井香名子 (2024)『DV と子ども虐待ソーシャルワーク－実践を変える視点と方法』日本評論社

松野真・秋山胖（2009）「若年層における特定異性間の暴力（dating violence）に関する研究―大学生を対象とした dating violence に関する意識・実態について―」『生活科学研究』31、117-128。

Melody Beattie（1987）*Co-dependent no more: How to stop controlling others and start caring for yourself.* Hazelden Foundation.（= 1999、村山久美子訳『共依存症―いつも他人に振りまわされる人たち』講談社）

Melody Beattie (2008) *The New Codependency: Help and Guidance for Today's Generation*（= 2011、村山久美子訳『共依存症心のレッスン』講談社）

内閣府男女共同参画局（2016）「ドメスティック・バイオレンス（DV）とは」https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/dv/index.html（2026.5.31）

内閣府男女共同参画局（2018）「若年層における性的な暴力に係る相談・支援の在り方に関する調査研究事業」報告書 https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/jakunen_chousa_report.pdf（2026.5.31）

内閣府男女共同参画局（2024）「男女間における暴力に関する調査報告書」https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/r05/r05danjokan-5.pdf（2026.1.26）

西本帆波・山口信夫（2025）「SNS が若年女性のルッキズム意識に与える影響に関するヒアリング調査」『愛媛マネジメント学会』7、61-86。

西尾和美（2000）「共依存の特徴と回復」吉岡隆編『共依存―自己喪失の病』中央法規、223-235。

野口康彦（2009）「大学生カップル間におけるデート DV と共依存に関する一検討」山梨英和大学紀要 8（10）、105-113。

Pia Mellody（1989）*Facing Codependence: What It Is, Where It Comes From, How It Sabotages Our Live.* Harper San Franciso. (=2002、内田恒久訳『児童虐待と共依存―自己喪失の病』そうろん社)

杉原保史（2023）「SNS がもたらす若者の生きづらさ」『こころの科学』SPECIAL ISSUE 2023、30-38。

陶嘉禕（2022）「若年層におけるデート DV の特徴と今後の支援に関する一考察」『人間

科学研究』35（2）、311-323。
東京都生活文化局（1998）「女性に対する暴力」調査報告書
特定非営利法人エンパワメントかながわ（2025）「調査報告書 2025 デート DV と予防教育の実態と意識～教員・中高生調査」
上野淳子・松並知子・青野篤子・赤澤淳子・井ノ崎敦子（2012）「大学生の性に対する態度がデート DV に及ぼす影響」『四天王寺大学紀要』53、111-122。
上野淳子（2014）「デート DV 研究上の問題点」『四天王寺大学紀要』57、195-205。
山口のり子（2003）『デート DV 防止プログラム実施者向けワークブック―相手を尊重する関係をつくるために』梨の木舎
吉岡隆編（2000）『共依存―自己喪失の病』中央法規

（とう　かい　日本女子大学人間社会学部社会福祉学科助教）